最高の冒険

「決まり！　宝探しの冒険に出かけるぞ！　すぐに出発だ！　船に乗って！」　船長が号令をかけました。

「ドラゴンに あうってのは どう?」

「それか、だれかを救い出すとか！」

急に、船長が声を ひそめました。「シーッ！　聞こえたか? 後を つけられてるぞ！　早く！ かくれるんだ！」　足音が だんだん 近づいてきます。一団は そばの 茂みの 後ろに かけこみました。

「いっしょに 遊んで いい?」ローリーの　妹　ニーアでした。辺りは シーンと していましたが、しばらくして、茂みの 間から荒くれ船長が 大またで 出てきました。

「言っただろう？　おまえは まだ小さいから、いっしょに 遊べないんだよ！」　真っ赤な 帯を 直しながら、ローリーが 答えました。「それに、女の子だったら・・・」　ローリーは鼻に しわを 寄せました。

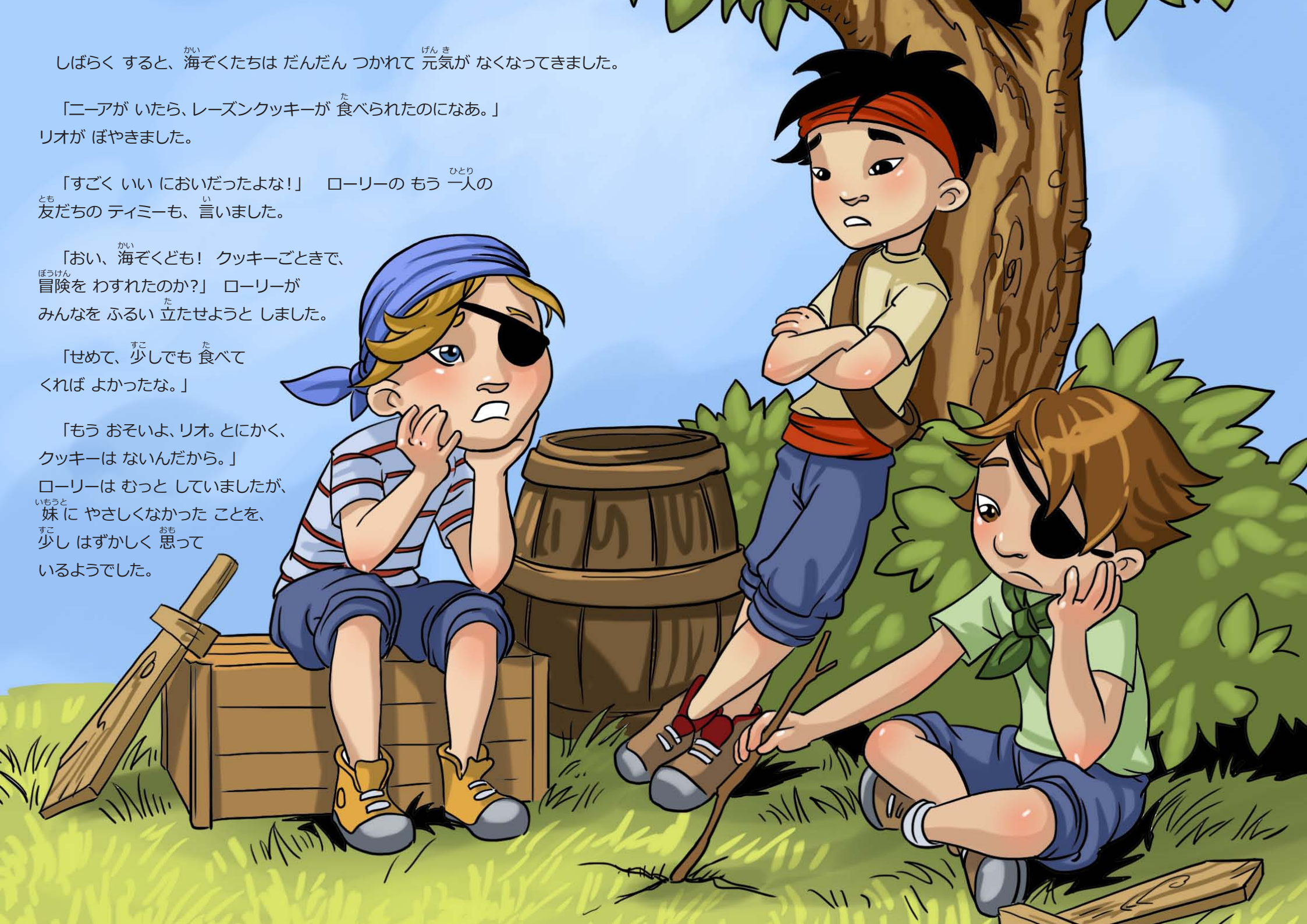
「人形 遊びだろ！」　ローリーの友だちの リオが そう 言いながら、海ぞくごっこの 仲間と、茂みを またいで 出てきました。

「そういう ことさ！　それに、どっちみち おまえには 楽しくないよ！」ローリーが きっぱりと 言いました。

「でも、お手伝いなら できるわ。えっと・・・お茶と クッキーを持って きたりね。」　妹の ニーアが言いました。

「お茶の 時間なんて、女の 子のやる ことさ！」　ローリーは そう言うと、背中を 向けました。「おいみんな！　出発だ！」

3人の 少年は 振り返りも せずに、冒険を 求めて 全速力で 走っていきました。ニーアは 後に 残されて、ひとりぼっちです。



しばらく すると、海ぞくたちは だんだん つかれて 元気が なくなってきました。

「ニーアが いたら、レーズンクッキーが 食べられたのになあ。」
リオが ぼやきました。

「すごく いい においだったよな！」　ローリーの もう 一人の
友だちの ティミーも、言いました。

「おい、海ぞくども！ クッキーごときで、
冒険を わすれたのか？」 ローリーが
みんなを ふるい 立たせようと しました。

「せめて、少しでも 食べて
くれば よかったな。」

「もう おそいよ、リオ。とにかく、
クッキーは ないんだから。」
ローリーは むっと していましたが、
妹に やさしくなかった ことを、
少し はずかしく 思って
いるようでした。

すると、どこからともなく、「おーい！」と
いう 声が したので、 少 年たちは ハッと
しました。振り返ると、まるで 絵本から 飛び
出てきたような 本物そっくりの 海ぞく 姿の
人が、こちらへ やって来ます。みんなの目は
くぎづけです。その 海ぞくは、ローリーの
お兄さん、エイデンでした！　片目に 黒い
眼帯を し、顔には 不 精 ひげまで かかれていて、
頭には 赤い スカーフを まいていました。

「おーい！」と、 少 年たちも 応えました。
ローリーの ユニークな お兄さんが 今日は
何を するのかと、みんな わくわくです。

「ローリー船 長 、冒険の 旅は いかがかな?」
と、エイデン兄さんが たずねました。

「最悪！」　ローリーが 答えました。それに
続いて、ティミーと リオが、ニーアが いっしょに
遊びたがっていた ことを 話し始め、クッキーを
食べそこなった ところで 話 が 終わりました。

「ふ～む。一つ、明らかな ことが
ある。冒険と 宝で いっぱいの 1日が、
これから 始まるという ことさ！」

「本当？」と ティミー。

「本当だよ。冒険と いっても、いろいろ ある。だけど ぼくは、
人助けを し、悪を 正し、悲しんでいる 女性を 守り、弱き 者のために
戦う 冒険が、最高の 冒険だと 信じているんだ。」

「ニーアの こと?」 さっき 妹に 言った ことを 反省して、ローリーが
たずねました。

「ああ。話を 聞いていると、ニーアは 悲しんでいるみたいだね。」

「仲間に 入れてあげないから?」

「そうだよ。だけど、それは 直せるよね。」と、エイデンが 答えました。

「じゃあ、宝ってのは？
クッキーの ことかな？」と、
リオが たずねました。

「レーズンクッキー
だったら、 宝探しを する
かいも あるね。」

このころには、もう
みんな ほほえんでいました。
ローリーでさえ、ちょっと
笑いました。

「だけど、ぼくたち・・・って
いうか、ぼく・・・さっきは
ニーアに 意地悪だったから
なあ。きっと、もう
クッキーは くれないよ。」
すると、ティミーと リオも、
残念そうに うなずきました。

エイデンが 言いました。「みんな、悪かったと 思っているようだね。じゃあ、
ニーアに ゆるしてもらうには どうすれば いいか、いっしょに 考えてみよう。」

海ぞくの 一団が、行進しながら ニーアの 部屋へ入って来ました。そして、ニーアを ぐるりと 囲むと、みんな 口々に 話し始めたので、エイデンが 手をあげて、みんなを 静かにさせました。「ローリーが、言いたい ことが あるそうだ。」

「これ、ニーアのだよ。」そう 言いながら、ローリーがニーアの 手に 包みを置きました。「ぼくたちみんなからだ。さっきは仲間はずれに して、ごめんよ。」

お兄ちゃんから 包みを受け取った ニーアの 顔に、少しずつ ほほえみがもどってきました。紙を 破ると 中身が ひざの上に 落ち、それを 見たニーアは にっこりと 笑いました。頭に かぶる 赤いハンカチと、黒い 眼帯が入っていたのです！

ニーアが 声を あげました。「うわあ！　わたしも いっしょに 遊んで いいの？」

「もちろんだよ！」 リオと ティミーが 答えました。

「それに、冒険の とちゅうで
ケガしたら、包帯を 巻いてくれる
女の 子も 必要だしね。」 妹が
何にでも ばんそうこうを
はるのが 好きなのを 思い出して、
ローリーが 付け足しました。

「ぼくたちの ゆかいな 仲間に
入ってくれるかい?」 ニーアの
周りに 集まっている やさしい
海ぞくたちを 代表して、エイデンが
たずねました。

「もちろんよ! ありがとう!
ところで、レーズンクッキーは
いかが?」と ニーア。

「もちろん、大かんげいだよ!」と、
ローリーが 答えました。ニーアが
みんなを キッチンに 案内すると、
リオも ティミーも 歓声を
あげました。

エイデンは ローリーに ウインク
しました。

(これこそ、最高の 冒険だね!)
そう 思いながら、ローリーも
エイデンに ほほえみ返しました。

終わり

文:アリーヤ・スミス 絵:サンドラ・レイン デザイン:クリスティア・コープランド 出版:マイ・ワンダー・スタジオ
Copyright © 2012年、ファミリーインターナショナル "The Best Kind of Adventure"--Japanese
http://www.mywonderstudio.com/0-5/2012/9/24/the-best-kind-of-adventure.html